

第34回 古代史を解明する会

天孫降臨と史実の関係

ニニギは出雲族に征服されていた北部九州に降臨

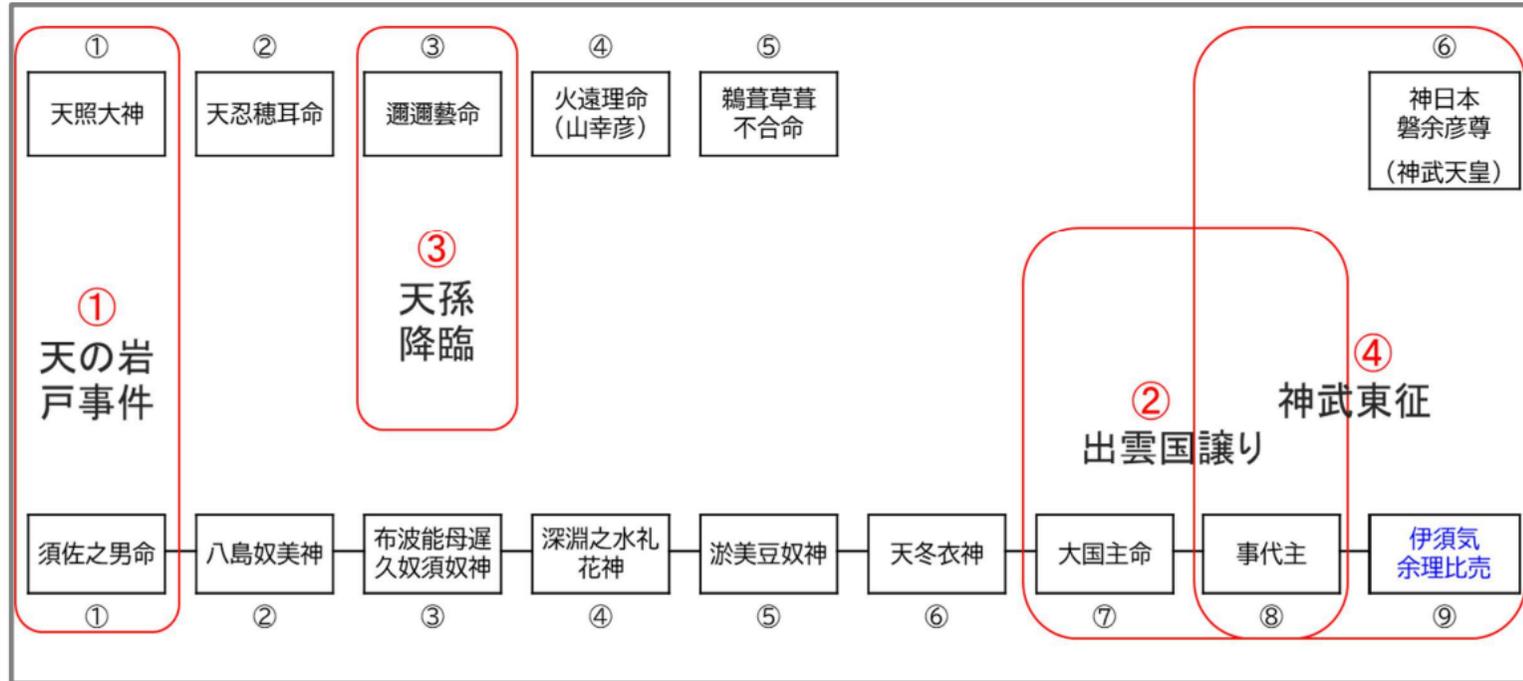
2023.10.7

可児俊信

解明の会での記紀時系列

3

大和政権成立前の出来事と時系列



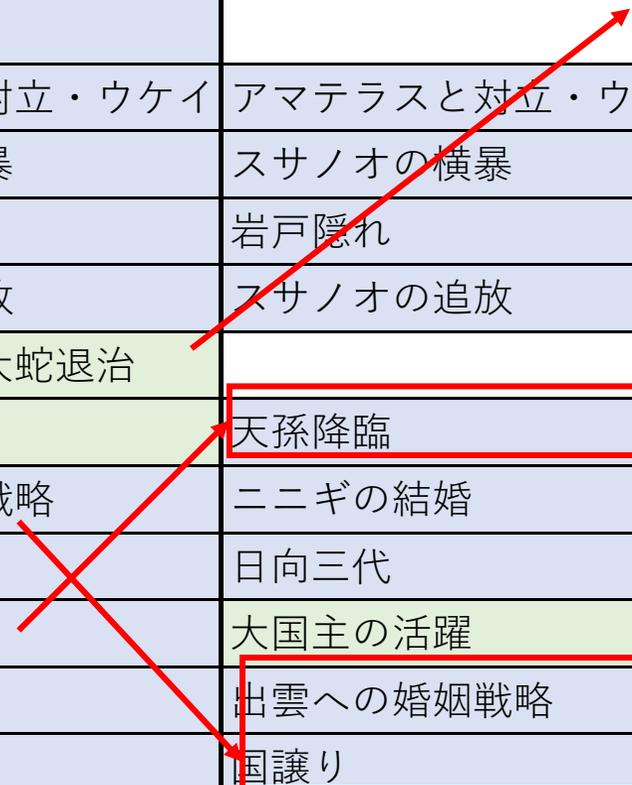
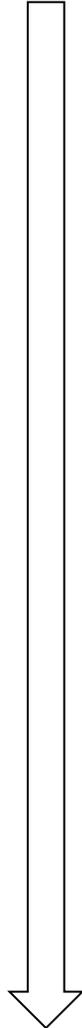
- 神武即位をもって、大和政権の成立とする。
 - 弥生時代が終焉し、大和に天皇を中心とした政権が成立し、古墳時代・飛鳥時代・奈良時代に連なる。
- 神武即位に至る経過は、上記の図が示す。
- 魏志倭人に記される倭国乱(倭国大乱)があり、出雲の国譲りが行われ、その直後に神武東征が行われたと見る。

出所:丸地三郎「大和政権成立とその直後に起きたこと」古代史を解明する会(2022年10月)

時系列の比較

記紀	解明の会 2022.10	可児
天地開闢		
国生み		
三貴子誕生		スサノオ八岐大蛇退治
アマテラスと対立・ウケイ	アマテラスと対立・ウケイ	アマテラスと対立・ウケイ
スサノオの横暴	スサノオの横暴	スサノオの横暴
岩戸隠れ	岩戸隠れ	大国主の活躍
スサノオの追放	スサノオの追放	ニニギの結婚
スサノオ八岐大蛇退治		日向三代
大国主の活躍	天孫降臨	スサノオの追放
出雲への婚姻戦略	ニニギの結婚	天孫降臨
国譲り	日向三代	出雲への婚姻戦略
天孫降臨	大国主の活躍	国譲り
ニニギの結婚	出雲への婚姻戦略	天孫降臨
日向三代	国譲り	岩戸隠れ
神武東征	神武東征	神武東征

□ 記紀の記述順との
大きな違い



本日のテーマ「天孫降臨と史実の関係」結論

1 ニニギの降臨地

- ・薩摩半島の隼人族懐柔のためアタツ姫と婚姻したが、
- ・出雲族が制圧(出雲族の猿田彦が支配)していた北部九州を天孫族が奪還し、ニニギが降臨

2 降臨者がオシホミミからニニギに交代した理由

- ・先にオシホミミが降臨していたが、オシホミミが早世したため、ニニギが後任として降臨

3 北部九州奪還後

- ・天孫族は出雲を婚姻政策で奪おうとしたが不首尾
- ・やむなく軍事力で制圧(国譲り)

天孫の降臨地

出雲の状況

1 スサノオの八岐大蛇退治前

- ・出雲族は小国に分かれており、ゆるく結合していた(2世紀後半の北部九州と同様)
- ・日本海経由で北陸および内陸と交易していた→出雲族は日本海側の盟主
- ・神在月の会合(毎年10月に出雲小国および北陸の小国と会議)も実施

2 スサノオの大蛇退治の真相

- ・スサノオが小国のうち1国を支配していた製鉄王(オロチ)を殺害
- ・殺害理由 鉄穴流しのため山や田畑が荒廃し、住民が困っていたため
- ・殺害方法 オロチ一族の宴会に酒で酔わせて殺害
- ・その後、稲田姫を連れて逃亡。八重垣神社で追っ手を撃退

3 退治後

- ・朝鮮半島から木種を取り寄せ、はげ山に植林
- ・スサノオが他の小国を連合させ出雲族連合の首長におさまる
- ・国力を高めた後、これまで進出していなかった北部九州に侵攻開始
- ・スサノオは出雲国建国者ではなく、連合化させ強力にしたことで初代扱い

ヤマタノオロチの正体 【伊賀多氣神社(島根県奥出雲町) 略記】

御主祭神は、素戔嗚尊の御子五十猛(いそたける)命である。

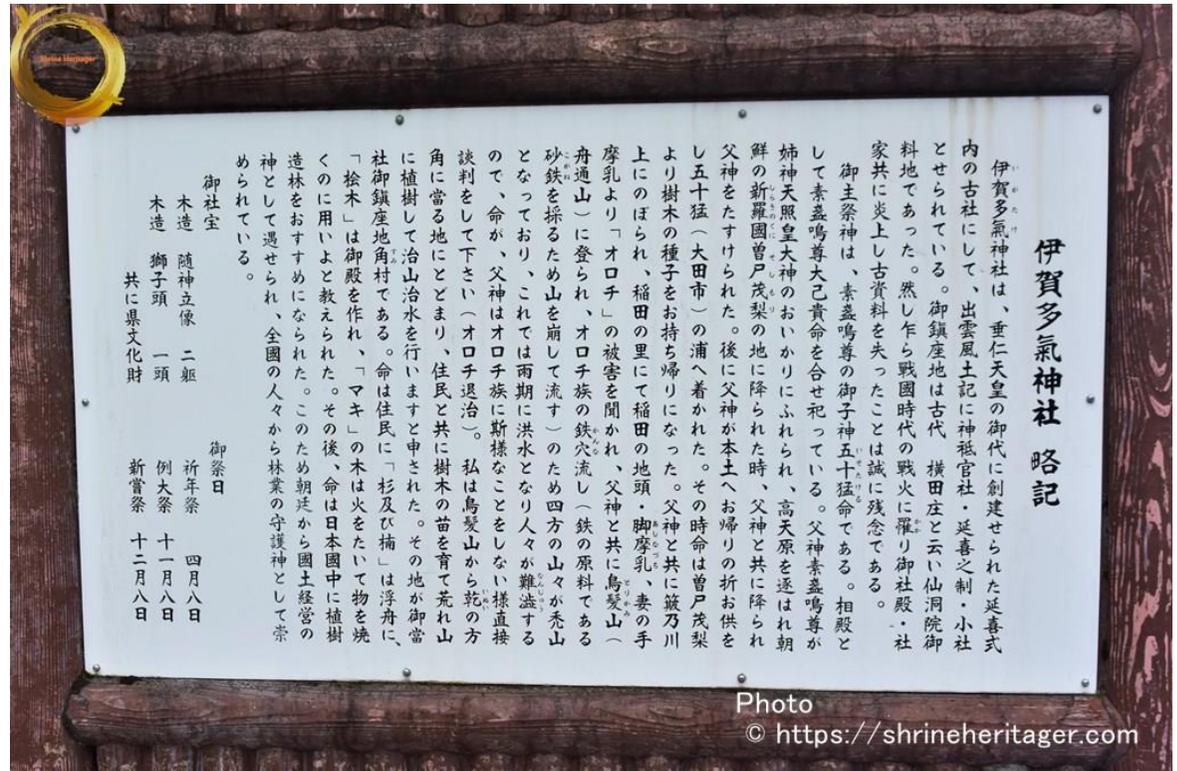
相殿として素戔嗚尊、大己貴命を合わせ祀っている。

父神素戔嗚尊が姉神天照皇大神のおいかりにふれられ、高天原を逐われ朝鮮の新羅國曾尸茂梨の地に降りられた時、父神と共に降りられ父神をたすけられた。

後に父神が本土にお帰りの折りお供をし五十猛(大田市)の浦へ着かれた。

その時命は曾尸茂梨より樹木の種子をお持ち帰りになった。父神と共に簸乃川上にのぼられ、稻田の里にて稻田の地頭・脚摩乳、妻の手摩乳より「オロチ」の被害を聞かれ、父神と共に鳥髪山に登られ、「オロチ族の鉄穴流しのため四方の山々が禿げ山となっており、これでは雨期に洪水となり人々が難渋するので、命が、父神はオロチ族に斯様なことをしないよう直接談判

して下さい。私は鳥髪山から乾(いぬい)の方角に當る地にとどまり、住民と共に樹木の苗を育て荒れ山に植樹して治山治水を行います」と申された。



伊賀多氣神社 略記

伊賀多氣神社は、垂仁天皇の御代に創建せられた延喜式内の古社にして、出雲風土記に神祇官社・延喜之制・小社とせられている。御鎮座地は古代 横田庄と云い仙洞院御料地であった。然し乍ら戦国時代の戦火に罹り御社殿・社家共に炎上し古資料を失ったことは誠に残念である。

御主祭神は、素戔嗚尊の御子神五十猛命である。相殿として素戔嗚尊大己貴命を合せ祀っている。父神素戔嗚尊が姉神天照皇大神のおいかりにふれられ、高天原を逐われ朝鮮の新羅國曾尸茂梨の地に降られた時、父神と共に降りられ父神をたすけられた。後に父神が本土へお帰りの折お供をし五十猛(大田市)の浦へ着かれた。その時命は曾尸茂梨より樹木の種子をお持ち帰りになった。父神と共に簸乃川上にのぼられ、稻田の里にて稻田の地頭・脚摩乳、妻の手摩乳より「オロチ」の被害を聞かれ、父神と共に鳥髪山(舟通山)に登られ、オロチ族の鉄穴流し(鉄の原料である砂鉄)を採るため山を崩して流す)のため四方の山々が禿山となっており、これでは雨期に洪水となり人々が難渋するので、命が、父神はオロチ族に斯様なことをしない様直接談判をして下さい(オロチ退治)。私は鳥髪山から乾の方角に當る地にとどまり、住民と共に樹木の苗を育て荒れ山に植樹して治山治水を行いますと申された。その地が御當社御鎮座地角村である。命は住民に「杉及び楠」は浮舟に「桧木」は御殿を作れ、「マキ」の木は火をたいて物を焼くのに用いよと教えられた。その後、命は日本國中に植樹造林をおすすすめになられた。このため朝廷から國土経営の神として遇せられ、全國の人々から林業の守護神として崇められている。

御社室
木造 隨神立像 二軀
木造 獅子頭 一頭
共に県文化財

御祭日
祈年祭 四月八日
例大祭 十一月八日
新嘗祭 十二月八日

Photo © <https://shrineheritager.com>

スサノオの北部九州への侵攻・制圧

1 スサノオの侵攻→スサノオの高天原への侵攻

- ・北部九州は小国に分立→侵攻に対して一致団結できなかったか
- ・侵攻時期は倭国大乱(弥生中期以降)
- ・遠賀川流域を制圧
- ・福岡平野で激しい戦闘後に制圧→アマテラスの武装
- ・戦線は現朝倉市(旧甘木市)に後退
- ・甘木市夜須川付近で停戦交渉→天安川でのウケイ

2 出雲族による北部九州支配

- ・支配地を圧迫→スサノオの横暴
- ・北部九州(久留米付近も含む)はスサノオ死亡まで被支配
- ・スサノオ(出雲族)は北部九州連合を設立させ、アマテラスを首長として間接支配
- ・スサノオとアマテラスが子供をもうける(宗像女神)→天安川でのウケイ

出雲族の最盛期の支配地域

5

天孫族と出雲族の支配地域区分(出雲族最盛期)

- 出雲族の支配地域の区分
 - 埋納・副葬区分
 - 戦傷遺跡分布
 - 青銅祭器の分布
(小銅鐸を含む)
 - 主要遺跡
 - 祭神による神社分
- ✓ 天孫族: 赤系統色
- ✓ 出雲族: 薄緑系統色



出所: 丸地三郎「大和政権成立とその直後に起きたこと」古代史を解明する会(2022年10月)

倭国大乱 出雲族と天孫族の争い 弥生中期後半以降

6

倭国乱 : 北九州の戦乱と青銅器の埋納



伊勢国歴史博物館常設展示図録より4点

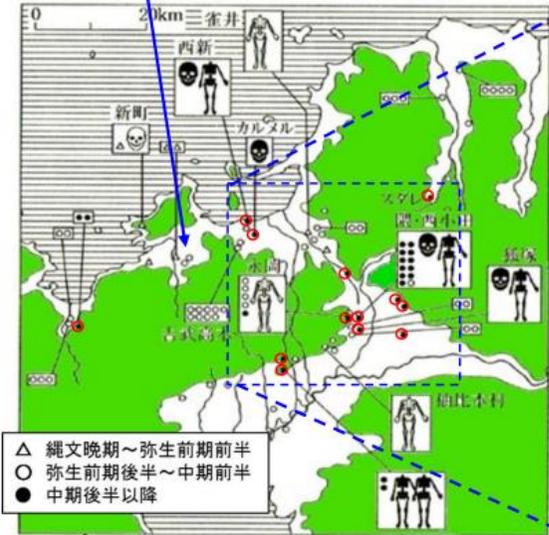


乙典遺跡大刀
全長約2m、ほとんど反りを持たず、直剣状をなす。

須玖岡本の王墓



王墓の復元模型



△ 縄文晩期～弥生前期前半
○ 弥生前期後半～中期前半
● 中期後半以降

寺澤薫 王権誕生より



ナ国と周辺のケニグニの呪禁

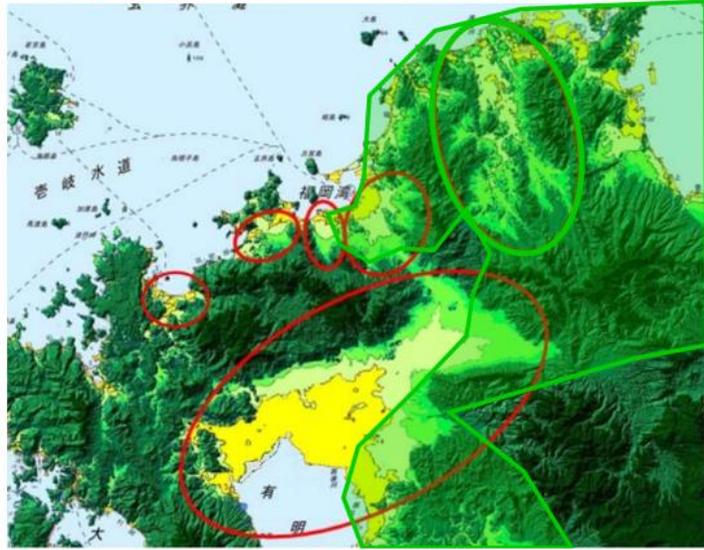
出所: 丸地三郎「大和政権成立とその直後に起きたこと」古代史を解明する会(2022年10月)

出雲族最盛期の北部九州

44	時代	唐津	糸島前原	早良	福岡平野	筑紫平野	遠賀川立岩
	弥生早期	水田稲作 支石墓 夜臼式	水田稲作 支石墓 夜臼式	水田稲作 支石墓 夜臼式	水田稲作 支石墓 夜臼式	水田無し	水田無し
	前期	初期に棺専用のカメを開発 支石墓に複数の壘積	遺跡数の増加無し 壘積墓に副葬品皆無	板付式土器 環濠集落 集落の拡大 壘積集落発生	遺跡数 急激な増加 壘積墓	壘積出土 有柄式磨製石剣 出土	下流域 水田 立石敷 木製舟遺跡
		宇木汲田 青銅器を副葬 有力者墓 後期には、 有力者の墓が 消滅	三雲南小路 王墓 井原縫溝 王墓	壘積墓王墓 壘積遺跡 (王墓ではない) 支配層の墳墓	壘積墓から 銅剣・銅戈 遺跡 壘積墓 急速に減少	鉄器出土	石包丁生産 スダシ 戦争遺跡 夫婦壘積墓
	中期	権馬塚に王墓	壘積墓 存続 平原王墓 その後 王墓無し	壘積遺跡は 継承するが 遺構・遺物は 減少	壘積の本 壘積 壘積の 激減 激動の 時代	鉄器普及	立岩・壘田 王墓
	後期	王墓は出ないが その後権馬塚が 有力集団		中期集落は 継承するが 遺構・遺物は 減少	壘積の本 壘積 壘積の 激減 激動の 時代	住宅跡の 覆土中から 多量の鉄器 墳墓から鏡・青銅 器・鉄器	後漢鏡副葬の墓 多数 王墓無し

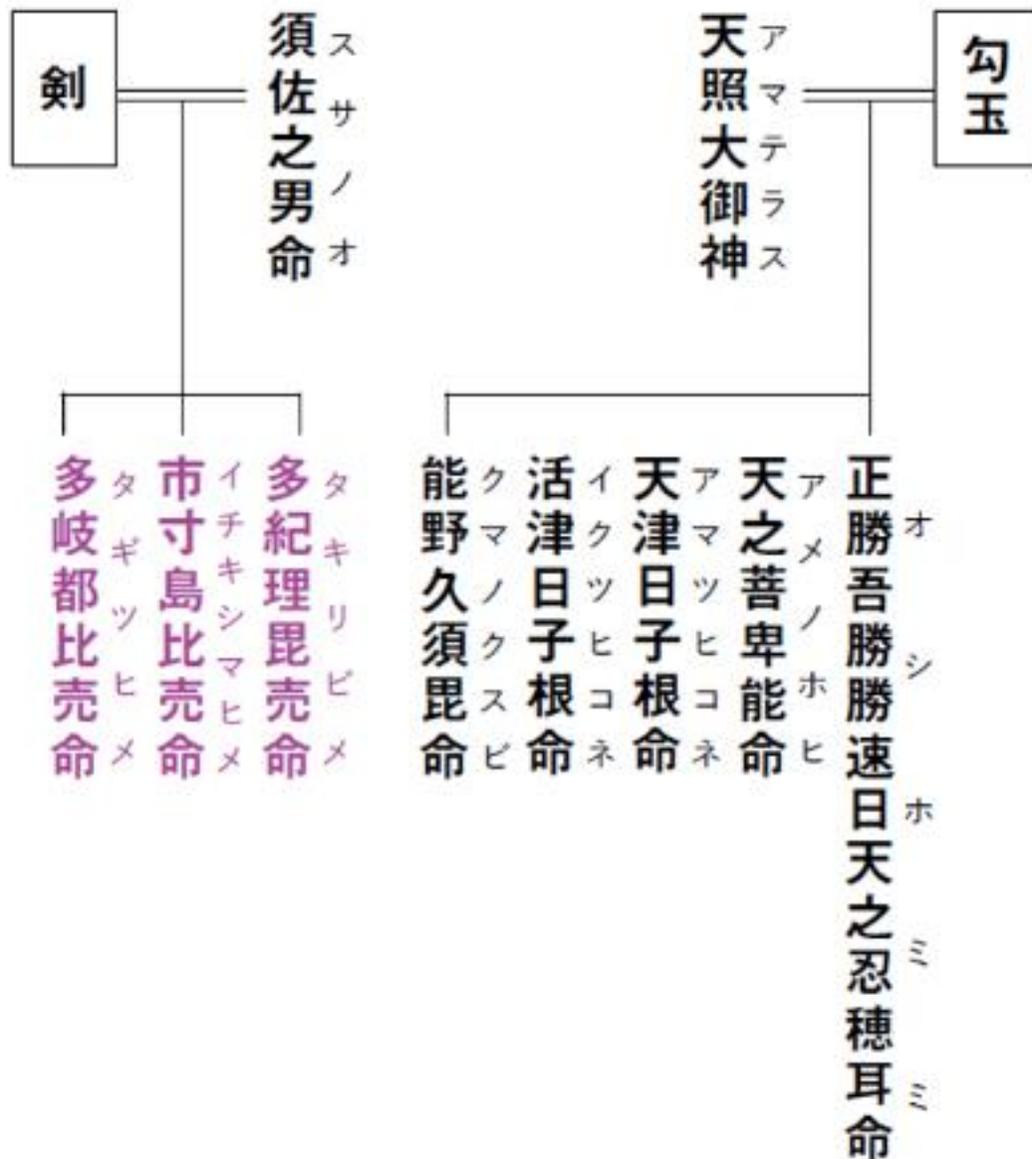
天孫族と出雲族 九州の勢力争い

- 最も出雲勢力が拡大して時期
 - 関門海峡から遠賀川流域
 - 大分県
 - 遠賀川流域の南側
(秋月・朝倉・日田・うきは・田主丸・久留米・八女・山門など)
 - 熊本県
- この地域が、出雲族の領域となったと推定。
- 天孫族と出雲族の領域分布が判明
- 出土青銅器・鉄器の所有者の推測
 - 佐賀県: 天孫族
 - 福岡県・時期と場所により、
: 天孫族 : 出雲族
 - 大分県: 出雲族
 - 熊本県: 出雲族



出所: 丸地三郎「出雲勢力」古代史を解明する会(2021年11月)

スサノオとアマテラスによるウケイの結果



出雲族支配下での天孫族の動向

1 天孫族の婚姻戦略

- ・ ニニギ 薩摩半島の隼人族を懐柔のためアタツヒメと結婚
アタツヒメの父は事勝国勝長狭→アタツヒメとの結婚
- ・ ホデリ(海幸) ホデリはアタツヒメの子。
隼人族と天孫族の争い→ヒコホホデミとホデリの内紛
- ・ ヒコホホデミ 海神族の豊玉姫と結婚(婿入?)。海神族の本拠地は対馬か?
→豊玉姫との結婚
- ・ ウガヤフキアエズ 玉依姫(豊玉姫の妹)と結婚し海神族の関係とさらに強化
→玉依姫との結婚
- ・ 狭野皇子(神武天皇) 隼人族の吾平津姫と婚姻→東遷前に吾平津姫と結婚

2 その他の天孫族の動向

- ・ 長男 アメノオシホミミ 早世前 田川付近(英彦山)を統治担当
- ・ 次男 アメノホヒ 人質として出雲へ
- ・ オオナムチをアマテラスの長女タギリヒメ(宗像神)と結婚

スサノオ死後の出雲族

- ・スサノオの死→根の国に行く

- ・スセリ姫の娘婿であるオオナムチが出雲連合を承継。北部九州連合も継承

- ・大和まで領地拡大し、次第に大和経営に注力…支配地が広がり、北部九州の統治不十分

- ・ニギハヤヒ(出雲族の一員として遠賀川付近を統治)
天孫族の反攻前に大和へ東征→ニギハヤヒの降臨
……ニギハヤヒの東征に備えて高地性集落発生

スサノオ死後の天孫族

- ・スサノオの死をきっかけに、北部九州を徐々に奪還→スサノオの高天原からの追放
- ・オシホミミの降臨→オシホミミの降臨準備
降臨地は出雲族猿田彦から奪還した地域→猿田彦の先導
- ・オシホミミの早世(後述)
ニギガが後任として北部九州に降臨→天孫降臨
- ・天孫族は出雲を婚姻政策で奪おうとしたが不首尾
アメノワカヒコは下照姫と結婚したが子がなく死亡→アメノホヒ、アメノワカヒコの派遣
- ・スパイを派遣→無名雉
- ・やむなく軍事力で制圧→国譲り
…この時、出雲族は祭祀器を埋納
猿田彦が出雲族連合を代理統治
→紀(第2の一書)経津主が猿田彦を先導に出雲国を視察
- ・天孫族は大和の動向の情報収集→ニギハヤヒの死を情報収集(先代旧事本紀)
速風の神がニギハヤヒの死亡を確認しタカミムスビに報告

スサノオとオオナムチの関係に関する記紀②



- ・ 古事記との対比
 - 日本の正史ではない、日本書紀は正史だとして、正史を信頼するとの論が有るが、正史か否かは、「正しいか、そうでないか」の根拠にならない。正史が故に、歪む可能性も高い。
 - 古事記の文章には、須佐之男命から大国主命までの具体的人名の入った系図が示され、別系統の須佐之男命の系統も記されている。
 - ・ 古事記・日本書紀の書かれた時代にも、その子孫が有力な部族として存在したと考えられる。
 - ・ 最初に提示された日本書紀の本文で、存在を否定された人々・部族が厳しい異議申し立てをしたことは想像に難くない。天皇家に近い有力者にも多かったと考える。
 - ・ 本文を否定する一書が並べられた原因と推察する。(反対派との妥協を図ったものとする。) **古事記が正しい可能性が高い。**
- ・ 弥生時代の多くの遺物・遺跡から紀元前200年-300年からスタートし3世紀後半(4世紀と見る説もある)までの長い期間(凡そ500年間)が存在する。
 - 須佐之男命の子が大国主命とすると、出雲の繁栄は2世代と成る。
 - ・ 1世代25年-30年、人の寿命が長くても80年-90年としても、2世代では100年-150年以内。
 - ・ たった100-150年では、
 - 出雲の青銅器武器型祭器の変遷・銅鐸の変遷に合わない。
 - 神無月・神在月が定着するほど、出雲勢力を全国に広げることではできなかったはず。
 - 日本書紀の本文は、考古学の成果とは相反することになる。
- ・ 「第8段本文:素戔嗚尊は、八岐大蛇退治の後、奇稲田姫と結婚し、大己貴命が生まれた。」との本文の記述は、考古学成果との乖離もあり、虚偽の記述と見る。
 - 否定する一書が複数記述されたことは、日本書紀が成立した時代でも、正しいと認めない有力者が多数いたことを示し、本文は、虚偽である可能性が高い。
- ・ 従って、大国主命は、須佐之男命と6代の子孫とする古事記の記述を正しいものとする。

出所:丸地三郎「古事記・日本書紀の成り立ちとその違い」及び「一書と天孫族・出雲族の系図」古代史を解明する会(2021年5月)

スサノオとオオクニヌシの親族関係図

古事記

①	②	③	④	⑤					⑥
天照大神	天忍穗耳命	邇邇藝命	火遠理命(山幸彦)	鵜葺草葺不合命					神倭伊波礼毘古命 神日本磐余彦尊 (神武天皇)
須佐之男命	八島奴美神	布波能母遲久奴須奴神	深淵之水礼花神	淤美豆奴神	天冬衣神	大国主命	事代主		伊須氣余理比売
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		⑨

日本書紀(本文)

①	②	③	④	⑤	⑥
天照大神	天忍穗耳命 天忍穗耳尊	邇邇藝命 瓊瓊杵尊	火遠理命 (山幸彦) 彦火火出見尊	鵜葺草葺不合命 鵜草葺不合尊	神倭伊波礼毘古命 神日本磐余彦尊 (神武天皇)
須佐之男命 素戔嗚尊	大国主命			事代主	伊須氣 余理比売
①	②			③	④

出所: 丸地三郎「古事記・日本書紀の成り立ちとその違い」及び「一書と天孫族・出雲族の系図」古代史を解明する会(2021年5月)

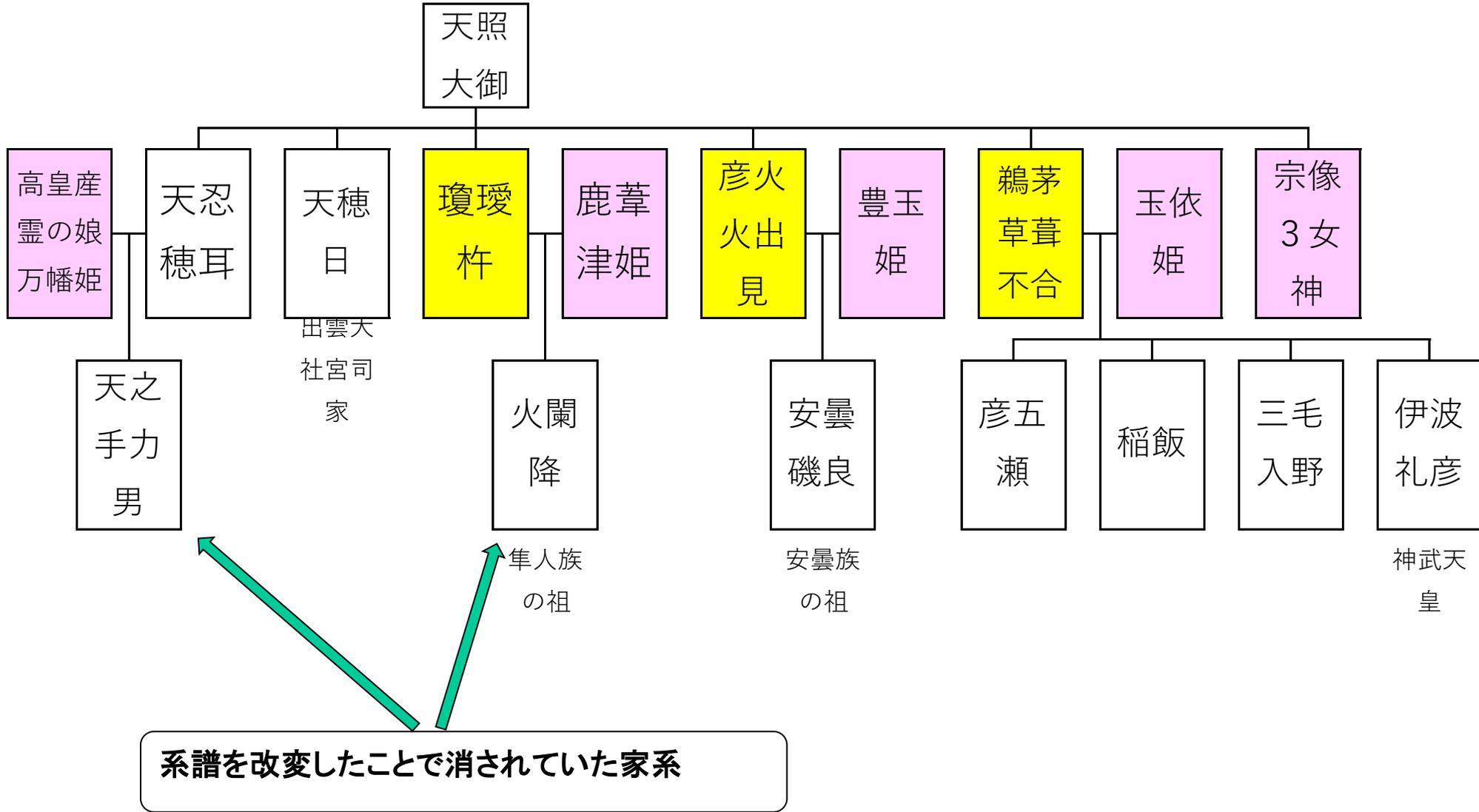
スサノオとオオナムチの関係に関する記紀の記述比較

	スサノオとオオナムチの親族関係	
	次世代	5 (6) 世後の子孫 (血族)
記載文献	紀 (本文) スサノオの子 紀 (第3, 第4, 第5, 第6の一書) ス サノオとの血縁記載なし	古事記、紀 (第1, 第2の一書)
スサノオとスセリ姫の関係	・古事記 親子 (娘) ・書紀 スセリ姫の記載なし	
矛盾点	<u>スサノオとオオナムチの2代では出雲の文化社会を形成する期間が足りない</u>	スセリ姫がスサノオの娘 (古事記) なのに数代後のオオナムチと結婚
各記述へのコメント	①古事記、紀 (本文、第1, 第2の一書) で、オオナムチをスサノオの血縁としているのはオオナムチを天孫族の血統としたいため ②書紀がスセリ姫を記載しないのは、オオナムチと兄弟関係となるのを避けるため、またはオオナムチとの世代不一致を避けるため ③ <u>古事記で系譜が記載されている</u>	
スセリ姫の実在性	①スセリ姫は古事記の各所に重要な役割で登場 ②先代旧事本紀、出雲風土記でも登場	

降臨者の交代理由

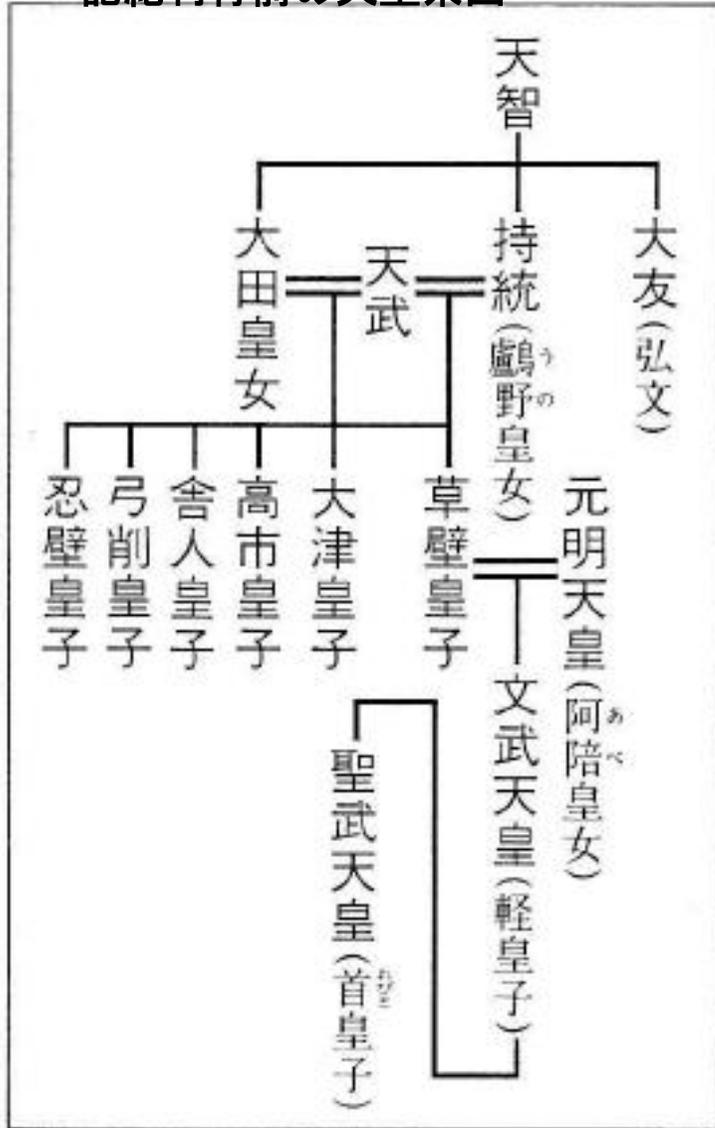
オシホミミの急死

想定されるアマテラスの系図(3代→3兄弟)



記紀が3代→3兄弟に偽装した理由

記紀刊行前の天皇系図



元正天皇は文武の妹

	天武 天皇	持統 天皇	元明 天皇	草壁 皇子	元正 天皇	文武 天皇	聖武 天皇
640							
650							
660							
670							
680							
690							
700							
710							
720							
730							
740							
750							

天皇在位期間

早世

早世

古事記
日本書紀

出所: 井沢元彦、「逆説の日本史 2」

記紀が3代→3兄弟に偽装した理由

689年 草壁皇子死後、本来なら同年代の皇子が即位すべき
親の持統天皇が即位するという不自然な譲位

697年 文武天皇死後、本来なら同年代の皇子が即位すべき
親の元明、妹の元正天皇が即位するという不自然な譲位

不自然な譲位を正当化するため、アマテラスの時代に先例を創作

ニニギは弟だが、アメノオシホミミの息子(=アマテラスの孫)に偽装

アマノオシホミミも草壁皇子と同様、早世だったため、偽装案を思いついた